

五代十国と宋（907～960・979～1279年）―年表―

- 875年 黄巢の乱起こる（875～884年）
- 880年 黄巢、長安で大斉皇帝と名のる。唐の僖宗、蜀へ逃亡。
- 882年 朱温、唐に投降し、全忠という名をもらう。
- 883年 李克用、長安をとりかえす。
- 884年 黄巢、泰山の狼虎谷で甥に首をはねさせた。黄巢の乱終わる。
- 907年 朱全忠、梁を建国（後梁）。唐朝滅亡。五代十国始まる。
- 唐朝がほろんでから華北（中原）では後梁・後唐・後晋・後漢・後周の順に五つの王朝（五代）が興亡した。
- 華中・華南・華北の一部では呉・南唐・前蜀・後蜀・呉越・南漢・楚・北漢・荆南・閩（以上十国）や燕や岐などの諸国が興亡した。唐朝がほろんでから宋の成立までの50年ないし約80年間を五代十国時代という。
- 916年 耶律阿保機、遼を建国し皇帝を名のる。
- 920年 耶律阿保機、契丹文字をつくる。
- 949年 『昇元帖』成る（李煜が作らせた集帖の祖）
- 960年 趙匡胤（北宋の太祖）、宋建国。
- 979年 宋、ほぼ中国を統一。
- 992年 『淳化閣帖』成る。
- 1038年 西夏建国（西夏文字は1037年に制定）
- 1045年 この頃畢昇、泥活字をつくつたらしい。
- 1069年 王安石、新法を立案。
- 1085年 旧法復活。
- 1094年 新法復活。
- 1100年 徽宗即位。
- 1101年 蘇軾没（1036年生）
- 1105年 黄庭堅没（1045年生）
- 1107年 米芾没（1051年生）
- 1115年 金建国される（女真文字制定は1119年）
- 1123年 『宣和書譜』『宣和画譜』成る。
- 1125年 金、遼をほろぼす。
- 1127年 靖康の変（徽宗、金に捕らわれ北宋滅亡する）
- 1129年 宋の高宗、臨安（今の杭州）を都として宋を復興。南宋始まる。
- 1206年 チンギス・カン、モンゴル王国（蒙古）を建てる。
- 1227年 チンギス・カン、西夏をほろぼし、帰途に病没する。
- 1234年 モンゴル、金をほろぼす。
- 1271年 モンゴルのフビライ、国号を元とあらため、大都（今の北京）に元を建国。
- 1274年 元寇、日本に來襲（文永の役）。マルコ・ポーロ、フビライに謁見する。
- 1275年 文天祥、勤皇の軍をおこす。
- 1279年 元により南宋滅亡。



元の勢力図（1294年）



南宋代の勢力図



北宋代の勢力図



五代十国の勢力図

南唐後主

(937
—
978 年)



南唐後主・李煜



南唐第三代皇帝。字は重光、姓は李、名は煜、号は澄心堂。在位は15年。李煜は、政治的能力はまっただくなかったが、文学、芸術的能力に優れ、詞の大成者であり、その詞は五代詞の最高峰とされる。李煜が、中国の文化、芸術にはたした役割には、はかりしれないものがある。たとえば、唐の玄宗が編曲した「霓裳羽衣の曲」の復元に尽力した。

「南唐画院」を創設した。これは、国家がはじめて振興した芸術学院で、すぐれた画家がここから育っていった。趙幹の「江行初雪図」は南唐の最高傑作といわれ、庶民がモチーフになった最初期の絵画である。

巨然(きょねん)は師の董源(とうげん)とともに、唐の王維(おうい)にはじまる南宗画(なんしゅうが)への道を開いた。巨然の「層巖叢樹図」は山水画の傑作である。

書は行書にたくみで、柳公権(りゅうこうけん)を好んだといわれる。集帖(しゅうてつ)の祖といわれる『昇元帖』(949年)をつくらせ、单帖(たんてつ)の『澄清堂帖』を刻したと伝えられるが、二つとも現存しない。書論に『書述』『書評』がある。

文房四宝の製造を国家あげておこない、文房具の発展に寄与した。

※「後主」とは、王朝の最後の君主の呼びかた。

※「詞」とは音楽に合わせて歌われた韻文の一つ。歌曲、楽府などともいう。詩と区別するため中国語でツーと言ったりする。宋代で隆盛したので宋词ともいう。

※「文房四宝」とは筆、硯、墨、紙のこと。

真冬に、薄着で漁をする庶民を真正面からとらえた最初の絵画と思われる。

董源や巨然(長江より南の地域)の山岳風景を描いた。



趙幹「江行初雪図」部分 台北故宮博物院蔵



董源「寒林重汀図」黒川古文化研究所蔵



巨然「層巖叢樹図」

台北故宮博物院蔵

李煜の後半生の詞より

虞美人（李煜最後の作品）

春花秋月何時了
往事知多少
小樓昨夜又東風
故國不堪回首
月明中

雕欄玉砌應猶在
只是朱顏改
問君能有幾多愁
恰似一江春水
向東流

浪淘沙令

簾外雨潺潺
春意闌珊
羅衾不耐五更寒
夢裏不知身是客
一餉貪歡

獨自莫憑欄
無限江山
別時容易見時難
流水落花春去也
天上人間

文房四宝（紙、墨、硯、筆のこと）

五代南唐の時代に、龍尾石硯、澄心堂紙、李廷珪墨が作られ（李煜はこれらを文房三宝といった）それに、宋代の諸葛高の筆が加わって文房四宝が確立したと考えられる。李煜は文房四宝の製造を国家あげておこない、その後の中国の文房具の発展に大きな影響を与えた。

※「文房」とは読書や執筆のための部屋。書斎。

春の花、秋の月、それらは昔も今も変わることなく、尽きること知らずめぐりきて季節をいろどる。それにひきかえ変わりてはたこの身、花を見るにつけ、月を見るにつけ、過ぎし日の思い出のみは数限りない。このわびしき高殿に、昨夜までもそよぎくる春風。はるかなる故郷、眺めやりてもののおもう悲しさにどうして堪えられよう、さえわたる月明りの下に。

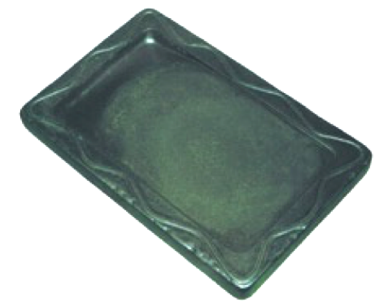
（村上哲見訳「中国詩人選集・李煜」）

すだれの外にしとど降りしきる雨。その雨の音の中に、春のけはいのやるせなく衰えゆくを感じる。うすぎぬの夜具には耐えがたい夜明け方の寒さ。今しがたまどろみの夢には、さすらいのわが身を忘れはてて、しばしのよろこびにひたつたものを（覚めてのちのこの侘しさ）

ただひとり欄干によりかかって眺めわたすのはよそう。遙かにはてしなくつらなる山川。人生の中に、別れねばならぬ時はしばしば訪れるが、めぐりあう時はめつたにないという。目の前を、水が流れ去り、花は散りゆき、そして春は過ぎていつてしまった。天上の世界とこの人の世の隔たり。

（村上哲見訳「中国詩人選集・李煜」）

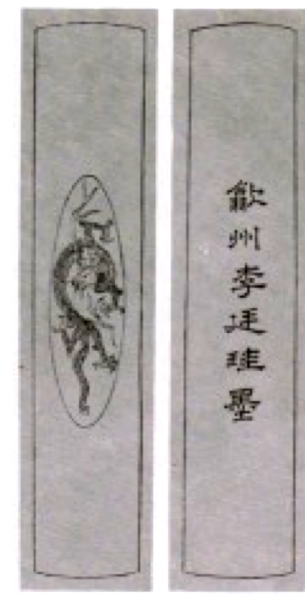
※「浪淘沙」は「波、砂をとぐ」と読む。



歙州硯（龍尾石硯、歙硯ともいう）
南唐官硯は、南唐の宮廷で作られた歙州硯。ほとんど現存しない。
龍尾石硯は歙硯の一種で、産地は江西省婺源県の龍尾山（羅紋山ともいう）である。

李廷珪墨（「李墨」ともいう）

中国史上最高の墨といわれるが、現存しないようである。廷珪は父と共に、唐末の戦乱を逃れて、故郷の易水から歙州に移住し、歙州の松をつかって墨業を起こした。古来「墨は黄山の老松をもつて最良とすべし」と伝えられている。黄山は南唐に属していた。李煜は廷珪のために、専用の工場をつくり援助した。蘇軾の七言古詩に「非人磨墨墨磨人」とあるように墨は人よりも大切にされた。



李墨の図案



中国の墨づくりはハンマーで叩いてこねる。



日本の墨づくりは、手や足でこねる。

澄心堂紙

中国史上最高の紙といわれる。



乾隆仿 澄心堂紙

「澄心堂」は、李煜の祖父（第一代皇帝）が金陵（南京）に建てた堂の名である。書齋として建てたのだろうか。執務室なのか。李煜は蜀から紙づくりの名人の刻道（えんどう）をよび、紙をつくらせ、その紙を「澄心堂紙」と呼んだ。桑の皮を材料にしたらしい？

諸葛筆

唐・宋代に宣州（現在の安徽省宣城县）の諸葛氏が作った筆を諸葛筆という。宋代の諸葛高の筆は蘇東坡や米芾によって愛用されたという。

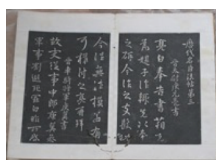
法帖

「法帖」とは、古人の書作品を、鑑賞や保存や手本にする目的で、それらを石や木に刻して、その拓本をとり、それらを冊子に仕立てたものである。

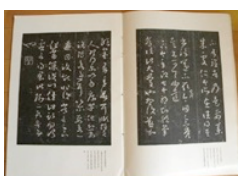
現存する法帖の最初のもは、宋代（992年・淳化三年）に作られた『淳化閣帖』だが、南唐の李煜がつくらせた『昇元帖』が集帖の祖といわれている。また李煜が刻したと伝えられる単帖の『澄清堂帖』があったらしいが、これらは、二つとも現存しない。これらは唐代から宋代への過渡期の法帖だと思われる。法帖には「集帖」「単帖」「專帖」などがある。



単帖の『雁塔聖教序』
「単帖」とは一つの作品だけを刻した法帖のこと。



集帖の『淳化閣帖』
「集帖」とは複数の書人の書を集めて刻した法帖のこと。



貴族社会から市民社会へ（中世より近世への過渡期）

五代十国時代は、十五以上の国ぐにが乱立する乱世ではあるが、戦争のない国も多かった。呉越は七十二年間、南漢は六十一年間、南唐は三十九年間、荊南、呉、後蜀は三十年以上平和がつづいた。平和な国ぐにでは、文学や美術、工芸、音楽がさかんであった。各地で隋唐の文化を継承し、次の宋代へとバトンを渡した。

大衆文化の誕生

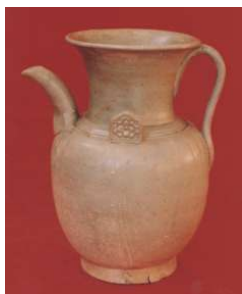
各地に平民出身の王（密売人、浮浪者、貧農など）が起ち、新しい文化の基礎を築いた。人びとは活気に満ち、はつらつとしていた。その庶民のエネルギーが社会の構造を変え、大衆文化を創造し、新しい時代を準備した。中で最も発展したのは南唐であった。南唐が繁栄したわけは、六朝文化、隋唐文化の継承地であった金陵（南京）が王都であったことと、後主李煜の存在が大きい。李煜は、庶民のあいだに文化を根づかせ、何事にもとらわれないおおらかな大衆社会をもたらした。その成果は、北宋に受け継がれ、さらなる大輪の大衆文化を咲かせることになる。

南唐は、937年―975年の三十九年間。王都は金陵（江寧）、現在の南京。初代皇帝の李昇は浮浪児であった。三代目の李煜の最後は哀れであった。975年12月北宋に破れ、北宋の都・汴京（開封）に幽閉され、それから二年後の978年末の太宗より誕生祝いとして贈られた酒に猛毒をもられて殺された。42歳であった。最後に作った「虞美人」の詞が毒殺の原因といわれている。

李氏の「建業文房之印」



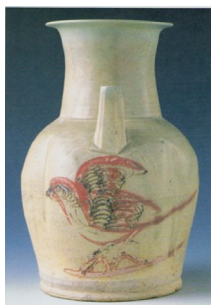
懷素の「自叙帖」におされた李氏の「建業文房之印」
これにより李煜が「自叙帖」を所蔵していたことが分かる。



越州窯 青磁壺 五代
西洋の銀器の模倣



越州窯 秘色青磁
秘色色とは瑠璃色のこと。
王室以外の使用を禁じたところから秘色という。晩唐から五代にかけて作られた。



長沙窯 五代 文字入り

「あなたと別れて千里逢える時はまだ来ないひと月三十日
あなたを思わぬ夜は無い」と書かれている。

陶磁器

唐代では磁器は特権階級のための高級品であったが、五代十国時代になって庶民用の日用品としても作られるようになった。（量産、機能美、輸出の増加）
越州窯は浙江省北部の越州地方で青磁を焼いた窯。
漢代末よりある古窯である。五代時代が最盛期で、「秘色青磁」が発明された。
長沙窯は「楚」の王都の長沙にあった窯で、中唐に始まり五代に役目を終えたいらしい。ここで絵付陶磁が始まり、おもに青磁などの日用品が作られた。

彫版印刷術（木版に字を彫刻する印刷）

五代の一つである後唐（923―936年）の馮道により、最初の大規模な木版による印刷事業がなされた。

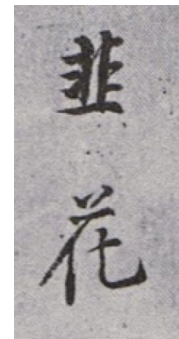
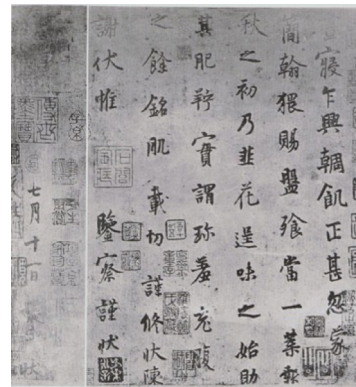
楊凝式（873年―954年）

唐末から五代末に生きた人。出身地は華陰（今の陝西省渭南市）。字は景度。名門の生まれである。唐朝に仕え、唐がほろんでからは、五代の各王朝に仕えた。立身出世したが、世間からは楊風子と呼ばれた。「風子」とは狂人の意味である。乱世を行きぬくため狂人をよそおったと言われている。

文章に巧みで、はじめ二王を極めてからのち、顔真卿、柳公権を学び、楷書、草書に巧みであった。当時は王羲之の再来とまでたたえられたが、張旭、懷素の流れにある人で、宋の三大家が称賛してから有名になった。その書は、宋代以後の新しい書道発展の原動力のひとつとなった。

韭花帖

紙に書かれた真跡。楷書。



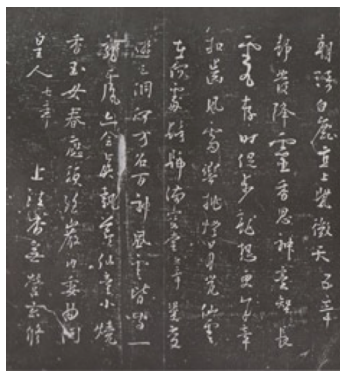
たべものをもらったことに対するお礼状。「韭花」とは「にら」のこと。

「・・・一葉が秋を知らせ、韭花の味をますころ、このよく肥えた子羊の料理はまことに珍しく、よろこんで賞味したい・・・」

字大約15mm。

歩虚詞

936年（清泰三年）詞は唐の韋渠牟の作。草書。



「歩虚詞」は、道家でうたう楽府の一種。「歩虚」とは仙人が空中歩行する意で、これは、神仙の歩くすがたの美しさをうたった歌曲である。

「顔真卿、柳公権が没して、書道は衰えたが、楊凝式だけが、二王、顔、柳の伝統を受けついでいる。蘇軾、米芾も楊凝式の書を模範としていたようだ。」と董其昌の跋語がある。

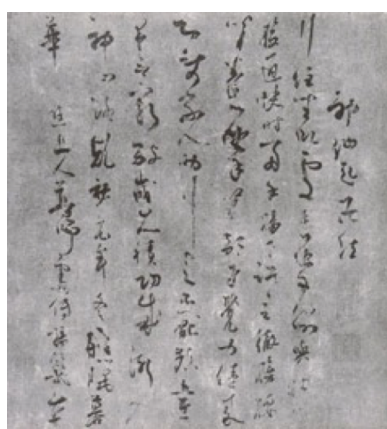
顔真卿と懷素の流れにある書で、懷素の「草書千字文」に通じるものがある。字大約15mm。



虎存時促步。龍想更成章。

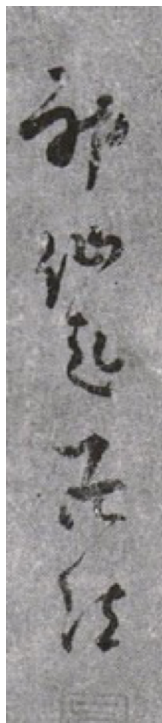
神仙起居法

948年（乾祐元年）紙に書かれた真跡。草書

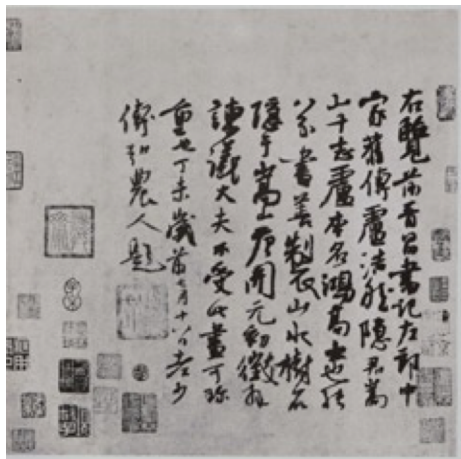


神仙を志すものの、日常の養生法を説いたもの。道士からさずかったものようである。

五言十二句の詩形になっている。



神仙起居法



唐の盧鴻のかいた「草堂十志図」の跋。
宋の三大家の蘇軾、黃庭堅、米芾は願法を繼承して
いる楊凝式の行書を高く評価し愛好した。
顔真卿の「争坐位帖」に似たところがある。



顔真卿「争坐位帖」より

旧暦（和暦・中国暦・天保暦・太陰暦・陰暦）と**新暦**（西暦・グレゴリオ暦・太陽暦・陽暦・NS）

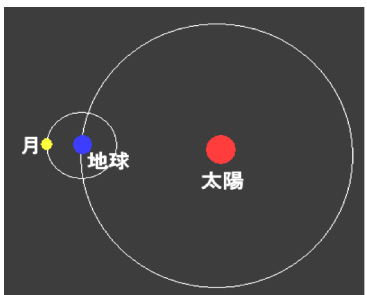
日本では明治五年十二月二日（1872 年）の翌日を明治六年一月一日として、新暦を採用した。（明治改暦）
この日はグレゴリオ暦（新暦・太陽暦）の 1873 年一月一日である。それまで使われていた暦は、六世紀後半に百済を経て中国から伝わった、太陽と月の運行にもとづいた太陰太陽暦（旧暦）であった。

中国では民国一年一月一日（1912 年）、中華民国建国とともに新暦が採用され、同年二月十二日の清朝滅亡とともに中国全域で正式な暦となった。

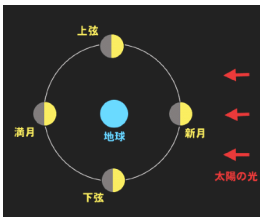
※グレゴリオ暦・・・1582 年にローマ法王グレゴリウス十三世がユリウス暦を改良して制定した暦。新暦である。

※ユリウス暦・・・紀元前四十五年一月一日から実施された太陽暦の一種。ユリウス・カエサルによって制定された。

太陰太陽暦（旧暦） 太陰暦だけでは季節がずれてくるので、太陽暦を取り入れて調整した暦である。紀元前二千年ころメソポタミアの古代バビロニアについてユダヤ、古代ギリシヤ、古代中国で作られた。旧暦、和暦、陰暦、農曆、月曆などともよぶ。

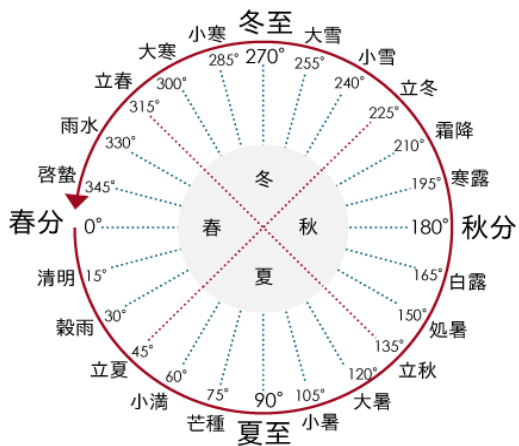
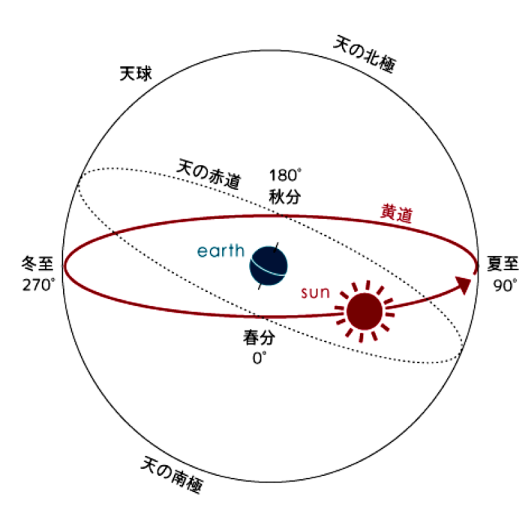


地球は太陽の周りを 365.2422 日（365 日と 5 時間 49 分 12 秒）で 1 周している。太陽暦では 1 年を 365 日とし残りの 0.2425 日を閏年で調整している。
月は地球の周りを平均 29.5 日で 1 周している。これは月の満ち欠けの 1 周期のことである。これを「朔望月」という。「朔」は新月、「望」は満月のことである。朔望月とは朔から次の朔、または望から次の望までの期間をさす。1 年を 12 ヶ月だとすると 12 朔望月は 12 ヶ月×29.5 日=354 日になり、太陽年より 11 日ほど短くなる。調整のため 19 年に 7 回、閏月を入れる。（11 日×19 年=209 日、209 日÷7=29. 85714285 日）閏月のある年は 1 年が 13 ヶ月になる。



月の満ち欠けとその和名

新月 （17 日の月）	立待月 たちまちつき	新月 しんげつ
（18 日の月）	居待月 いまちつき	二日月 ふつかつき
（19 日の月）	寝待月 ねまちつき	三日月 みかつき
二十日月 はつかつき	（弓張）	上弦 じょうげん
下弦 かげん	十日夜 とおかんなや	十三夜 じゅうさんや
二十三日夜 にじゅうさんや	待宵月 まちよいづき	（14 日の月）
二十六夜 にじゅうろくや	十五夜 じゅうごや	望（満月） ぼう（まんげつ）
晦日（つごもり） （三十日の月）	十六夜 いざよい	



季節	月暦	節気	名称	太陽暦の日付	太陽視黄経
春	一月	正月節気	立春	2月4日	315度
	(睦月)	正月中気	雨水	2月18・19日	330度
	二月	二月節気	啓蟄	3月5・6日	345度
	(如月)	二月中気	春分	3月20・21日	0度
	三月	三月節気	清明	4月4・5日	15度
	(弥生)	三月中気	穀雨	4月20日	30度
夏	四月	四月節気	立夏	5月5・6日	45度
	(卯月)	四月中気	小満	5月21日	60度
	五月	五月節気	芒種	6月5・6日	75度
	(皀月)	五月中気	夏至	6月21・22日	90度
	六月	六月節気	小暑	7月7日	105度
	(水無月)	六月中気	大暑	7月22・23日	120度
秋	七月	七月節気	立秋	8月7・8日	135度
	(文月)	七月中気	処暑	8月23日	150度
	八月	八月節気	白露	9月7・8日	165度
	(葉月)	八月中気	秋分	9月23日	180度
	九月	九月節気	寒露	10月8・9日	195度
	(長月)	九月中気	霜降	10月23・24日	210度
冬	十月	十月節気	立冬	11月7・8日	225度
	(神無月)	十月中気	小雪	11月22・23日	240度
	十一月	十一月節気	大雪	12月7日	255度
	(霜月)	十一月中気	冬至	12月22日	270度
	十二月	十二月節気	小寒	1月5・6日	285度
	(師走)	十二月中気	大寒	1月20・21日	300度

二十四節気 暦の季節のズレを解消するために、中国で戦国時代の頃に作られた。これは、黄河の中・下流域の気候をもとに作られた。日本では中国の中原との季節感の違いを補足するために「日本版の七十二候(京都を基準にしたと思われる)」や「雑節」を取り入れている。「雑節」には、節分、彼岸、社日、八十八夜、入梅、半夏生、土用、二百十日、二百二十日などがある。

黄道は太陽の見かけの通り道。黄道の春分点を起点として十五度ずつの二十四分点に分けてあるが、分点のあいだの日数は等しくない。一年を冬至と夏至、春分と秋分で四等分し(二至二分)、その真ん中に立春、立夏、立秋、立冬を置き四等分した(四立)。この二至二分と四立を合わせて「八節」とよび、その間隔は約四十五日である。さらにそれを三つに分けたものが二十四節気または二十四気である。一月〜三月を春、四月〜六月を夏、七月〜九月を秋、十月〜十二月を冬とし、春夏秋冬に分けた。各月は「節気」と「中気」に交互に分けられる。「黄経」は春分点を0度とし、東回りに三百六十度まで測った太陽と地球の角度である。

太陽暦（新暦、西暦、グレゴリオ暦） 古代エジプトで紀元前二千九百年頃生まれた、太陽年を基にして作られた暦。現在、日本はじめ世界各国で用いられている。一年を三百六十五日とし、四年に一回閏年を置いて三百六十六日とし、四百年に三回閏年を置かない。

六十干支（ろくじゅうかんし） 十干と十二支を組み合わせ、一から六十までの数字を

あらわしたもので十干十二支ともいう。殷代（紀元前五世紀〜十一世紀）

からあった。干支は「えと」ともいう。十二支は、古代中国で、天球を

十二年で一周する木星の運行から考え出されたものらしい。

十干は「甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸」

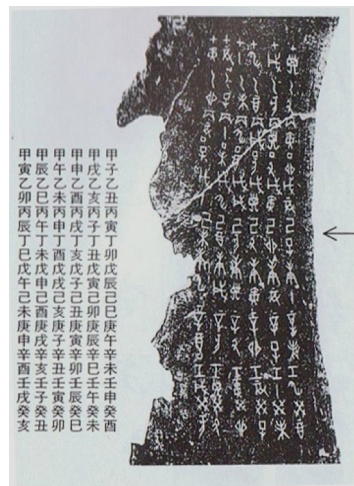
十二支は「子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥」

十干は五行（木・火・土・金・水）と陰陽の兄弟とつながって、

甲は、木の兄、乙は、木の弟、丙は、火の兄、丁は、火の弟、

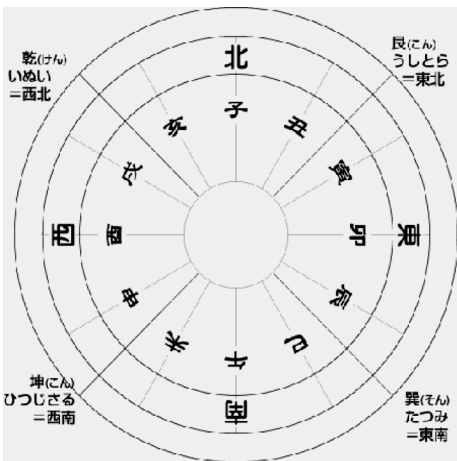
戊は、土の兄、己は、土の弟、庚は、金の兄、辛は、金の弟、

壬は、水の兄、癸は、水の弟と呼ばれた。



殷代・甲骨文
六十干支が刻されている。

0 甲子 (かっし)	1 乙丑 (いつちゅう)	2 丙寅 (へいいん)	3 丁卯 (ていぼう)	4 戊辰 (ぼしん)
5 己巳 (きし)	6 庚午 (こうぶん)	7 辛未 (しんび)	8 壬申 (じんしん)	9 癸酉 (きゆう)
10 甲戌 (こうじゅつ)	11 乙亥 (いつがい)	12 丙子 (へいし)	13 丁丑 (ていちゅう)	14 戊寅 (ぼいん)
15 己卯 (きぼう)	16 庚辰 (こうしん)	17 辛巳 (しんし)	18 壬午 (じんご)	19 癸未 (きび)
20 甲申 (こうしん)	21 乙酉 (いつゆう)	22 丙戌 (へいじゅつ)	23 丁亥 (ていがい)	24 戊子 (ぼし)
25 己丑 (きちゅう)	26 庚寅 (こういん)	27 辛卯 (しんぼう)	28 壬辰 (じんしん)	29 癸巳 (きし)
30 甲午 (こうぶん)	31 乙未 (いつび)	32 丙申 (へいしん)	33 丁酉 (ていゆう)	34 戊戌 (ぼじゅつ)
35 己亥 (きがい)	36 庚子 (こうし)	37 辛丑 (しんちゅう)	38 壬寅 (じんいん)	39 癸卯 (きぼう)
40 甲辰 (こうしん)	41 乙巳 (いつし)	42 丙午 (へいご)	43 丁未 (ていび)	44 戊申 (ぼしん)
45 己酉 (きゆう)	46 庚戌 (こうじゅつ)	47 辛亥 (しんがい)	48 壬子 (じんし)	49 癸丑 (きちゅう)
50 甲寅 (こういん)	51 乙卯 (いつぼう)	52 丙辰 (へいしん)	53 丁巳 (ていし)	54 戊午 (ぼご)
55 己未 (きび)	56 庚申 (こうしん)	57 辛酉 (しんゆう)	58 壬戌 (じんじゅつ)	59 癸亥 (きがい)



日本では強引に新暦に変更したためおかしなことが多くある。

新暦にしたのはそれなりのわけがあるのだが、新暦の月日をそのまま旧暦の年中行事や季節の表現に使ったから異常な現象がみられるのだが、それを、なんとも思わないで惰性的にくりかえしていることが恐ろしい。

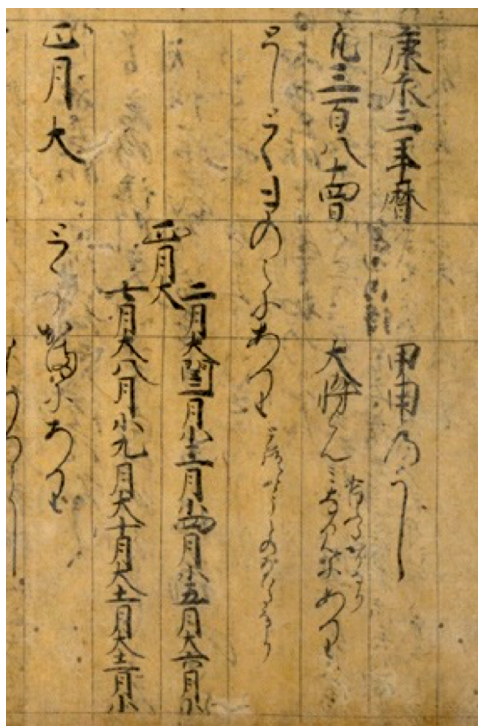
元旦に春でもないのに**新春**などと書いたハガキが届く？**冬至**あたりに年賀状を書くのは、この日を境に春に向かう意味で良いのかもしれないが、旧暦の正月一日は立春にもっとも近い新月の日ときまっていたので、正月は立春あたりからである。（立春は新暦の二月初旬〜中旬。）中国では今も**春節**として祝う。そのほうが自然ではないか。）**七草がゆ**を正月七日に食べているが、正月ころには七草はとれない。旧暦の正月七日は新暦では二月下旬ころである。**七夕**（七月七日）には、ほとんど天の川が見られない。七月七日はまだ梅雨があけていないだろう。（旧暦の七夕は新暦の八月初旬から下旬。）

赤穂浪士が討ち入ったのは元禄十五年十二月十五日未明で、雪が降り積もっていた。（十二月半ばに雪が降り積もるなんて、異常気象だったのか？（旧暦の十二月十五日は新暦の一月三十一日で最も寒い季節であった。にもかかわらず、今でも十二月十四日あたりになると騒いでいる人たちがオオゼイいる。）

旧暦の季節感、京都の気候を基準にしていると思われるので、日本列島の東西南北ではかなり差があるだろう。

歴史年表の年号は西暦に変えてあるが、月日は旧暦のままにしてあるものがほとんどのようなのだ。

「年齢計算二関スル法律」千九百二年（明治三十五年）十二月二十二日施行。「年齢」となえ方に関する法律「千九百五十年（昭和二十五年）一月一日施行。で政府は**満年齢**を推奨している。昔は**数え年**であり、しかも旧暦の生年月日の場合に、計算がややこしくて間違いも多いようだ。旧暦で数え年の時代の生年月日や出来事の日付は注意して計算しなくてはいけない。



「仮名暦」部分 康永3年（1344年）

日本の南北朝時代の北朝のもの
仮名暦は日本での暦の普及に大きな影響を与えた。

宋による中国統一

五代の後周の将軍だった趙匡胤（太祖）によって、九百六十年に宋は建国された。趙匡胤の弟の第二代皇帝趙匡義（太宗）は九百七十九年に北漢を滅ぼし約七十年ぶりに中国を統一した。千百二十七年金に滅ぼされ、南に逃げるまでを北宋、逃げてから南に宋を再建してから千二百七十九年に滅ぶまでを南宋と呼ぶ。宋朝は南北合わせて約三百年つづいた皇帝独裁王朝である。

宋は文人官僚による文治主義をとった。その結果、軍事力の弱まった宋は周辺異民族にたえずおびえることになる。しかし、国内では平和のうちに五代十国時代の成果を受けついで豊かな文化が開花した。唐代の支配階級であった貴族が完全に消滅し、かわって士大夫とよばれる新しい文人官僚による政治や文化がはじまった。

書道では、**宋の三大家**と呼ばれる個性的な書家が現れた。

